おぐりはんがんてるてのひめせっきょうさいもん

#33 小栗判官照手の姫説教さい文

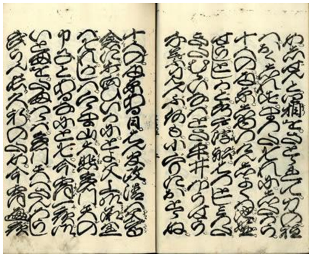
作者：［薩摩若太夫］

刊行：不詳

◇◇

📖 解題

■ 内容



[K96/2]

本書は、近世後期説経祭文の薩摩派正本である。内容は、近世前期の説経節代表作の一つ「おぐり判官」とほぼ同様の物語で、これをさらに細かく場面分割し、御菩薩池（みぞろがいけ）の段から横山成敗の段まで全33段の構成となっている。

■ 説経節

説経（説経節）は、仏教の説経唱導から発したもので、中世から近世初期に音曲と結びついて語り物芸能となり、その後さらに、人形操りとともに語る説経操り芝居という劇場芸能を生み出して繁栄した。説経節で語られる物語は、のちに浄瑠璃や草子などの江戸文芸に吸収されて影響を与えたが、芸能としては、中世的で素朴な作風や音楽性を頑なに守ってきたために時代に取り残され、宝永（1704～）から正徳（1711～）ごろには、京都、江戸、大坂では見られなくなっていたとされる。

しかし、衰退後も山伏の祭文語りが語り伝えていたものとみられる。これを、寛政（1789～）のころに再び芸能として復活させたのが初代薩摩若太夫である。初代薩摩若太夫は、江戸本所四ツ目の米屋主人米千（『嬉遊笑覧』）とも、浅草広小路の千代鶴近八ともいわれている（『説経浄瑠璃家元薩摩若太夫津賀太夫名簿』）。復活した説経節は、やがて西多摩地域に移り地方芸能として明治から大正期に大いに親しまれた。

■　小栗伝説

浄瑠璃や歌舞伎など、さまざまな形で親しまれている「小栗判官照手姫」の物語について、関東に伝わる「小栗伝説」との関係を指摘する説もある。『鎌倉大草紙』には「小栗伝説」の原型とみられる記述があり、以下のような内容となっている。

応永 30 年（1423)、鎌倉公方足利持氏が、常陸国の小栗城を攻め落とした（小栗満重の乱)。この時、満重の子･助重は忍び逃れたが、相模国の権現堂で強盗に毒殺されそうになる。そこを遊女・照姫に助けられて、盗賊が盗んだ鹿毛なるあら馬に乗って藤沢の清浄光寺（遊行寺）に馳せ上がり、上人（遊行寺の住持）の計らいによって時衆（時宗の門徒）２人とともに三河国に逃れた。そして、のちにこの盗賊を誅伐した。

■　説経正本

説経の内容が文字として記録されるのは、人形操りと結びついた芸能となってからである。古いものとしては、寛文６年（1666）山本九兵衛板正本などが確認されているが（『説経正本集 第２』)、さらに遡って、寛永（1624～）ごろには古活字版や製版で出版されていたとする指摘もある。

近世後期の薩摩派正本は、おそらく、それら近世前期に出版された説経正本をもととして、馬喰町吉田屋版の版本が作られ、さらに、地方芸能化とともにこれを書写したものなどが流布していったものと考えられている。

当館所蔵本は、「正本所馬喰町三丁目吉田屋小吉」と記された版本で全 33 段からなる。ただし、段ごとに別々に刊行されたものとみられ、再板本や版元が異なるもの（馬喰町三丁目板元和泉屋栄吉）が混在している。また、表紙に「説経さい文」に替わって「説経浄瑠璃（理)」と記されるものもある。

なお、当館所蔵本は全 33 段を３冊に綴じているが、３冊とも外題は失われており、帙には「小栗判官一代記」と記された題箋がある。

📖　本文を読む

＜版本＞

『小栗判官照手の姫説教さい文（上･中･下)』薩摩若太夫　吉田屋小吉
［K96/2/1］－［K96/2/3］

＜翻刻＞

『日本庶民生活史料集成　第 17 巻　民間藝能』五来重著 三一書房 1972 ［380.8/8/17］　※翻刻掲載はｐ408～425　全 33 段のうち一部の段のみ

📖　参考文献

＜近世後期説経節について＞

「特集 多摩の伝統芸能」(『多摩のあゆみ』vol.57 多摩中央信用金庫 1989) ［K05.98/4/57］

「特集 多摩の説経節」(『多摩のあゆみ』vol.80 多摩中央信用金庫 1995) ［K05.98/4/80］

秋谷治「説経祭文の江戸期資料小考」(『一橋論叢』116(3) 日本評論社 1996)
※当館未所蔵　一橋大学機関ﾘﾎﾟｼﾞﾄﾘで閲覧可能

『貝祭文・説経祭文』小山一成著 文化書房博文社 1997［768.59/3］

秋谷治「民衆文化の伝播と変容:『説経さい文小栗判官･照手の姫』をめぐって」(『一橋論叢』121(3) 日本評論社 1999)
※当館未所蔵　一橋大学機関ﾘﾎﾟｼﾞﾄﾘで閲覧可能

＜説経節全般および説経「小栗」について＞

『説経正本集　第二』横山重校訂 角川書店 1968［912.4/23/2］

『説経節』荒木繁･山本吉左右編注 平凡社 1973＜東洋文庫 243＞［912.4/25］

『岩波講座　歌舞伎･文楽　第７巻　浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』鳥越文蔵ほか編 岩波書店 1998［774.08FF/2/7］

「古浄瑠璃 説経集」信多純一･阪口弘之校注 (『新日本古典文学大系　第 90 巻　古浄瑠璃 説経集』岩波書店 1999) ［918/20/90］

『ミラクル絵巻で楽しむ「小栗判官と照手姫」』太田彩監修 東京美術 2011 ［K72.52/25］

『現代語訳 完本 小栗』信多純一･川崎剛志著 和泉書院 2014［K96.52/13］

＜小栗伝説＞

「鎌倉大草紙」(『群書類従』第 20 輯 合戦部 巻 382) ［K08/17/1-20］

影山博･川島孝一「『鎌倉大草紙』注釈（１）」(『大平台史窓』vol.1 大塚書店 1982) ［K24/201/1］